

青年医師シュレーバーにおける自然と身体

——禁止令下のトゥルネン推奨の論理——

三 井 悦 子

„Die Natur und der menschliche Körper“

beim jungen Arzt D. G. M. Schreber

—Zu seiner Theorie der Turnenförderung im Zeitabschnitt der Turnsperr—

Etsuko Mii

はじめに

19世紀中葉、ザクセンの医師 Daniel Gottlob Moritz Schreber (1808–1861, 以下シュレーバーと記す) は、健康や体育、家庭教育などに関して多くの書を著した。本稿では *Das Buch der Gesundheit. Eine Orthobiotik nach den Gesetzen der Natur und dem Baue des menschlichen Organismus.*¹⁾ (1839年, 『健康の書, 自然の法則と人間有機体の構造に即した整形生体学』²⁾, 以下『健康の書』と記す) を取り上げる。執筆当時シュレーバーは弱冠30歳, 本書は彼の処女作でもある。医師の体育論がトゥルネンをいかに評価していたかを明らかにする一環として, 本稿ではこの書に表れた彼の身体観・自然観を分析し, のちの彼の思想や実践との関連について考察する。

1. 禁止令下のトゥルネン

1808年生まれシュレーバーは, 1833年ライプツィヒ大学で医学の学位を取得, 1836年から開業医となり, その傍らライプツィヒ大学の内科学および治療学講師を務めている。本稿が取り上げる『健康の書』はこの時代に書かれた。その後1844年に, E. A. Carus (1797–1854) から整形外科研究所を引き継ぎ, そこで彼の治療体操が本格的に展開されていく。そして1855年には彼の名を後世に残すこととなった有名な書 *Ärztliche Zimmergymnastik* (『医療室内体操』) を著す。この書は50年足らずの間に国内で30版を重ね, 英語・オランダ語・フランス語・スペイン語版が出されている。のちにこの書の附図が『榭中体操法図』としてわが国初の国定体操となったこともここに付記しておく。若きシュレーバーが医学と臨床の間で, 医師として何をなすべきかを模索した時期に『健康の書』はまとめられた。

この時期は彼の個人史においてだけではなくドイツスポーツ史においても特別な時期に当たる。いうまでもなく当時はドイツ全土にわたってトゥルネン禁止令がひかれていた

(1820年1月から1842年6月)。シュレーパーはこのトゥルネン禁止令解除直後の1843年に、トゥルネンを強く奨励しこれを国家制度として推進すべく議会への請願書 *Das Turnen vom ärztlichen Standpunkte aus, zugleich als eine Staatsangelegenheit dargestellt* (トゥルネン—医者立場から、そして国事として—、以下『トゥルネンについて』と記す)を出している。そこで彼が主張したのは、時代が要求する全き人間を形成すること、全き個こそが領邦国家ザクセンを支える基盤となるということであった。この全き人間とは強い意志や行動力を実現させる頑強で健全な身体を基礎とする存在を指した。そしてこの理想の実現のために、多くの付加価値を持った強い筋肉運動すなわちトゥルネンが奨励されたのである³⁾。

さて、考察の本旨に入ろう。『健康の書』はトゥルネン禁止令下の1839年に出版された。執筆は出版の前年、1838年であることが本書の序に記された日付からわかる。このトゥルネン禁止令の真つ只中にありながら、シュレーパーはトゥルネンを正面から褒め称える。

「トゥルネンという名で総称されるすべての運動は身体運動のあらゆる長所を完璧に提供するものである。筋肉活動の全面的な訓練を目指す体操的な運動のどれであれトゥルネンには劣る。」⁴⁾

もっともこの書のなかでトゥルネンに関する記述の量はそれほど多くはない。本書の副題「自然の法則と人間有機体の構造に即した整形生体学」からもわかるように、彼はここで人々の生活に自然の法則に則ったさまざまな好ましい習慣を定着させようとしている。この好ましい生活習慣を彼は「生活の規則」と呼ぶ。たとえば、食養生や日光浴、睡眠などがそうであり、これらと同列に身体運動 (*Körperliche Bewegung*) は並べられている。身体運動はこの生活の規則のひとつとして必要とされた。そしてこの項目として、とくにダンスとトゥルネンのふだつが取り上げられたのである。さらに具体的な体操設備についてはわざわざあるが例示し、これ以上はヤーンとアイゼレンによる専門書を参照せよとしている⁵⁾。

このようにシュレーパーはトゥルネンが生活に位置付けられるべきであるとの考えに立つて、トゥルネンの効用を説明し、また注意事項を付け加えている。ここでシュレーパーが取り上げたトゥルネンは、多くの生活規則の中のひとつに過ぎない。とはいえ、彼のトゥルネンに対する評価たるや絶大である。身体運動が必要というとき、何はさておきトゥルネンである。もう一度引用しておこう。

「トゥルネンという名で総称されるすべての運動は身体運動のあらゆる長所を完璧に提供するものである。筋肉活動の全面的な訓練を目指す体操的な運動のどれであれトゥルネンには劣る。」⁶⁾ 身体的な側面だけではなく、精神的な効果についてはこう述べる。「この訓練の利益はとても抜きでているので、肉体的・精神的健康を維持増進する素晴らしい方法であることに間違いはない。」⁷⁾ そして、健康を維持増進するだけではなく、予防や治療的な効果についても次のように言及する。

「一般論としての身体運動の長所はさておき、男らしい真の力を発展させる最も素晴らしい方法、あるいはすべての運動に役立つ機敏性と安全性を獲得するための最も素晴らしい方法であると共に、… (トゥルネンによって養われた) 身体の抵抗力はあらゆる反健康的な影響に、少なくとも間接的には、高められ強化される。それと共に身体は病気にかかりにくくなり、あらゆる種類の苦役に耐え得るものとなる。」⁸⁾ また、こうも言っている。「…

我々は数知れないほど多くの人々の悩みや病弱たとえば虚弱で病気がちな体質であるとか早すぎる老化や痔、痛風、胸部や下肢の故障、ヒポコンデリーやメランコリーなどの原因が十分な肉体運動の欠如にあることを知るだろう。また我々は逆のことも知っている。多くのほとんど不治にみえるような病気も粘り強い連続した有益な運動がそれを退けるのである。」⁹⁾

シュレーバーはさまざまな目的を達成するために「身体運動」が有効であると言っているのではない。対象を「身体運動一般」にしてはいない。この時期においてもなお正面から、トゥルネンこそが最良であると言うのである。国民の健康問題は切実な時代の要求とあいまっていやがうえにも身体運動にスポットライトをあてた。そしてあるいはしかし、本書のような医師による、医学上の必要という強い説得力によって、禁止令下においてもなおトゥルネンは高く評価され、その必要が叫ばれたのである。

つぎに本書においてシュレーバーがトゥルネンを推奨する際の具体的な論拠について考えてみたい。それは禁止令解除直後に出された『トゥルネンについて』に示されている主張と同じであろうか。『健康の書』(1839)の3年後、トゥルネン禁止令は解かれた。その翌年、前述の『トゥルネンについて』が出されている。この4年間にトゥルネンをめぐる状況はいうまでもなく大きく変動している。禁止令解除直後の彼の書『トゥルネンについて』において、シュレーバーがトゥルネンを推奨するとき、次の引用文からわかるとおり、その根拠即ち彼による医学的合理性は生理学に基づいていた。

「この先の考察全体についてのより信頼できる根拠を確保するために、まずはじめに明らかにしておくべきことがある。筋肉運動の内的な生命現象と、有機体全体に対する筋肉活動の関係や影響を、生理学が実証済みの事実即して示していることを述べておく」¹⁰⁾としたのである。そして筋肉の構造や運動中の筋肉の生理的な変化、血液循環、呼吸の機構を解説した上で、次のように言っている。「以上のことから、健康と生命の快活さがその強さと調和に基礎をおいている生命体の主要な諸機能は、筋肉活動によって自然の摂理に最もかなった変化と病気治療の能力を増すような変化をとげることができることがわかるだろう。」¹¹⁾このように、トゥルネンの合理性を説くシュレーバーの、その医学的論理は生理学におかれていた。そしてトゥルネンによって目指されるべきは、国家の復興であった。「…要するに力強い生活を営んでいくための健康と国家組織の隆盛のためには、国家を形成している個々の成員の身体と道德の強化こそが、第一に求められる必須の前提条件である。」¹²⁾

では『健康の書』においてはどうかだろうか。彼がこれを導き出す経緯は次のとおりである。「現代は、自然科学や治療科学が誇ることでできる大きな進歩があった。この進歩によって、これまで秘密に包まれていた多くのことやあるいはぼんやりとしかわからなかったことがら、とくに人間の自然に対する本来的な位置についての正しい認識—これはそのほかの知や能力に関連した人類のめざましい進歩によって徐々に忘れ去られていったものなのだが—そしてこの認識から生まれる生活の規則—というものが明らかにされることとなった。現世での至福つまり肉体的・精神的な健康を獲得することこそが何よりも肝要である—ということを経験するとき、この種の新しい試みはそれがたとえ多くの不完全さのためにわずかな欠陥を埋めるに役立つだけのものだとしても、対象の重要性ゆえにその正当性が理由付けられるであろう。それぞれの時代とともに生活の外的形式や関係は変形するもの

であるがゆえに、新たな欠陥の尽きることのない発生は時代の流れに根拠をもつ。そうであるからこそもし仮にその生活規則が本当に実践的なものであるべきものならば、その都度の生活の外的形式や関係の状態と可能な限り正確に一致して然るべきものであろう。また、もし仮にこうした試みを実践しようとする者が一方では偏狭な科学主義、無味乾燥、片手落ち、他方で不完全さ浅薄さという非難を回避しようと思う時、多様な読者一般の知識ゆえに並々ならぬ困難が生ずる。…人間自然の理解しやすいイメージを提供することによってのみこの目的を達成することができるだろう。…」¹³⁾

こと人間に関する科学の成果は、専門的な科学者にのみ理解され還元されるだけではまったく十分ではない。それは人類の幸福のために国民一般大衆に理解され、実践に生かされるものでなければならない。そして人間にとっての至福は肉体的・精神的健康にある。そのために時代の生活状況に応じた生活の規則というものが考えられるべきである、とシュレーバーは言う。中世以来の医学の伝統すなわち医学の究極の目的は人間の身体についての真理の追究であり、実用的医学—疾病の治療—は本来の医学の目的ではないとする古い医学への彼の批判が「偏狭な科学主義」と言う言葉に皮肉をこめて示されている。人間という有機的な生命体とは何か、それはどのように存在すべきか、こうした問いに対して科学的な論拠に基づきながらもあくまでも彼は実践的な臨床医であろうとする。科学に基づいた理想を実現する手立てとして、生活の規則を定め、それを幫助すること、これらを総じて医師の使命であると考えたのである。こうして『健康の書』においては、人間の自然について論じることから始められた。

2. 運動と力——生命体の本質

人間の自然とはどのようなものか。その本質とは何か。シュレーバーのこうした問いかけは、人間にとってなぜ激しい身体運動が必要かというもうひとつの問いにも答えを導き出している。

「すべての生命は力の表現と運動、すなわち自発的な活動にその本質がある。静止が多ければ多いほど生命は少なく、死に近い。生命体に内在している諸々の力は、勤勉な使用と適切な訓練によって、その本来的性質のままに保たれ、かつ成長し、栄える。もしそうでない時、生命は鈍く不活発になり内的な強さや耐久力を失うことになる。」¹⁴⁾より活動的であることが人間としての生命の本質を全うさせると彼は言う。肉体を休ませず、自然に即した適切な運動によって十分に活動させることが、人間という生命体にとってその本質を支える重要な行為であると言うのである。また、彼は「生命体」を「質料 (der Stoff)」と「力 (die Kraft)」という概念によって説明している。次に少々長い引用になるが、彼が言うところの自然生命体に着目してみよう。

「自然界の無限に多様な個々の力をより詳細に観察すると、そうした個々の力もつまるところはそれらの力がそれぞれの質料ごとに、単に見かけの上でのみ異なっているにすぎないことがわかる。その場合に力はその質料の中で、そしてその質料を通じて自らの効力を発揮するのである。一即ち、自然界に存在する力とは普遍的な根源力が何らかの形で外化したものであり、それぞれに異なる方向性をとったものであること、そしてこの根源力是对立し合う二重性を内包する形式のもとで、常に引き合う力と退け合う力(収縮力と膨張

力)として姿を現すものであると理解し得るのである。この不断に続く双方の引きつけあいと反発を通して、類似のあるいは対立する力・質料の合一と分離を通して新たに合成された力が発生し、質量・形相・物体が形成され更新されあるいはまったくその姿を変え、自然から割り当てられた自らの位置を主張するに至るのである。このようなまったく正反対の力の相互作用によって、すべての天体は永遠の循環、釣り合いのとれた均衡、自らに割り当てられた軌道上に保たれる。天体上のすべての生命活動、すべての形成、生産や変化もこれらに依っている。こうした対立は絶え間なく均衡をとろうとする力(二元性)であり、互いの交戦は普遍的な基本条件であり、そこでは自然全体の大きな歯車が途切れることなく動きつづけている。至るところにこうした二元的な関係が現れている。普遍的に広がっている地球上の諸力の相対する二極、磁性と電気におけるそれ、力と質料との関係、精神と身体、男と女など。すべての部分、どんなに取るにたりない部分でも即ち自然のどの部分も密接に全体と結びついており、かつほかの力や物体との不断の相互作用を行っている。即ち外部の世界から影響を受けまた反対に影響を及ぼすこともできる。しかしこの場合それぞれの部分が自然に即した自らの立場を十分に主張することができるのは、外側から途切れることなく自らに加えられる力に対し、それに見合う分の自らの力による遡及効を対置し得る限りにおいてである。そしてこうした平衡が崩れたとき個々の部分の作用領域が制限を受けるかまったく消滅する。生命体にとっては(限定的な意味で)病気と死である。ひとつの物体の質料と固有の力とが、多様に変化に富みかつまとまりがあればあるほど、この力の相互作用は当然大きくなる。なぜならば、そうした物体の力はその多種多様性によって同じ分量だけ自らと関係している外部世界の諸力と対立することになるからである。」¹⁵⁾

シュレーバーはここで人間の自然について述べようとしている。彼は自然界のあらゆる生命体の本質つまり人間についてもそこに、質料(物質)と力を見る。力とは物質と物質の間に生じる何らかの作用力であり、その力の発揮が運動である。彼はたしかに自然(生命体)を動的に変化させる原動力は、自然物(生命体)そのものに帰属していると考えている。自然の根源的な実体はこうした「力」にあるとした。こうした「力」の存在こそが生命事象の原理であるとする。しかも生命体を支配する法則は、力学的力だけではなく安定と保存を確保する場の概念に依拠して説明される。根源力の実体は、ある空間の二元的な互いの力が緊張関係にありながら同時に均衡を保とうと変化を続けることにあると言う。このような場の理論において物質は二義的なものとされる。物質は影響を受けて変容する物体である。シュレーバーは生命体の原理についてこのように考えていた。したがって自然の法則が物質(肉体)に与える作用に対して、彼は従順であろうとしたのである。また自然の法則に即して肉体の生理および物理的構造をとらえようとしたことも当然である。そして「精神と肉体のすべての部分、そしてその生命活動が規定どおりの状態と強さと方向性を持ち、つまりこれらが互いに完全に一致している状態を健康と呼ぶ」のである¹⁶⁾。

物質は力に対して二義的なものであるとシュレーバーは考えた。力は物体を変化させるエネルギーである。熱エネルギーによって水がその形相を変え水蒸気になるように、人間の精神的生活を充実させ、高次元の自分へと引き上げていくエネルギーを、彼はトゥルネンに見出した。もちろんトゥルネンは多くの生活規則の中のひとつではあったが。これについては次のように言っている。「肉体—すなわち精神の土台と道具—を、より強くなるよ

うに鍛える役目をなす一切のものが、その鍛錬について完全に役目を果たしそして健康の感覚を高めるならば、また精神の自由な発展を本質的に促進するならば、精神は身体力とその耐久性を自覚することによって、直接的には自信・勇気・毅然さ・意志と実行力などを獲得する。—なんと計り知れない利益であろうか。ルソーがこのことをとてもうまく言い表している。『身体は魂に従うために生き生きとしていなければならない。よき従僕は強くあらねばならない。身体は自らが弱ければ弱いほど命じることが多くなり、その分、身体はますます魂を疲れさせる』¹⁷⁾

肉体は精神の土台でありかつまた道具であるところでシュレーバーは言う。彼によれば、精神が考え決定した事柄を実行するその基盤となるもの、そしてその目的を達成するために必要な手段が肉体である。この点について A. リッターは、シュレーバーが精神的存在としての人間、人間とは精神的な生にその本質があると考えていると指摘している¹⁸⁾。果たして A. リッターの言うとおり、シュレーバーは精神的生活をより高尚にするために、肉体を精神の従僕と考え鍛えようとしたのだろうか。また、M. シャッツマンの言うように、教育という名を借りた肉体への迫害によって、シュレーバーの息子の魂は殺害されたのか¹⁹⁾。シュレーバーの考える精神と身体にもう少し接近してみよう。

3. 肉体の知

「人間はどのような肉体的・精神的な能力においても、ひとつの美しき全体へとまとまったものであり、それゆえに人間はその全存在の可能な限り高いレベルの鍛錬を手に入れるべく努力すべきであり、また、人間の自然本質の規定にしたがって、発達させ形成すべきなのである。今ではもう自然であることについてはその痕跡しか持ち合わせていない人間はみな、本当の生き生きした欲求に達していると感じてしまっている。しかし、少なくとも文明化された国々や高い地位においては身体的な訓練が精神的なそれよりも劣っているというような人類に対する表面的な見方が、すでに我々に示されてしまっている。誤った教育、甘やかし、安逸、粗悪な官能的快楽、多様な生活関係の束縛などによって、自然の衝動や然るべき十分な身体発達のための条件はしだいに鈍らせられ部分的には完全に壊死させられてしまっている。」²⁰⁾

このように、彼は独特の身体観をもって人間を眺めている。決して身体を下次元においているわけではない。むしろ精神生活の充実ばかりを重視し身体的なそれを評価しない現状に批判的でさえある。『トゥルネンについて』においても、彼は次のように述べている。

「身体は精神の基礎、基盤でありかつその担い手である。両者即ち身体と精神はこの上もなく親密に互いに融和し依存しあっている。精神という認識の樹木は、生命の息吹あふれる大地に根づいた時にのみ、真に立派に成長をとげ、豊かに見事な実をつけることができるのである。」²¹⁾

ここでいう大地が身体を指していることは言うまでもない。たしかに彼は十分な身体的発達こそが精神生活の基盤となると考えている。しかしながら身体を精神の全くの従僕と考えているわけではない。精神という認識が支配する樹木に花を咲かせ、実を生らせるのは大地である。しかもその大地は生き生きとした生命の息吹にあふれていなければならないというのである。目に見える花や果実だけを評価するのではない、土くれや岩石にも生

命を見、大地を醸成するように、身体をとらえている。ここでは身体的な発達を土台にしてその上に精神的発達の可能性を重ねてみる精神優位な心身観とは別種のそれが見られる。もうひとつの心身観がシュレーパーの中では展開されている。

「人間の精神がものを考える行為に際して、ある種の自立のレベルに到達するや否や、また人間の精神が現にそれ自身が本当に存在するということを意識するやいなや、必然的に高次元の問いが湧き出てくる。私は何者か？ 私の存在する目的は何か？ どうすればそれを達成できるのか？ これらの問いに対して、精神面・道徳面については宗教や理性が答えを出してくれる。しかし、より肉体的な生理的なものに注視するならば、この問いへの十分な説明は次のことによってのみ得られる。つまり、われわれがその一部を成しているところの全体、外部世界すなわち自我の外にあるすべての現象と力の総体を同時に、われわれの観察の対象にすることによってのみ説明が可能なのである。」²²⁾

このように彼は人間の精神面・道徳面を重視する一方で、人間を肉体的存在としてとらえようとしている。私は何者か？ 私が存在する目的とは？ どうすればそれを達成できるのか？ この問いに答えるのは精神や宗教や道徳ばかりではない、肉体を出発点にしてこれを考えてみようというのである。前節で明らかにしたように、シュレーパーによれば肉体 *der Körper* はときに物体 *die Physis* として理解されている。肉体は物体であるがゆえに自然の法則が適用される。すなわち *Physis* が、自然現象、生理あるいは自然力の意であることからすれば、このような肉体的存在である人間は、なによりも自然の法則に従って維持し発展させられるべき存在である。すなわち、身体は自然そのものである。したがって自然の原理を身体に当てはめて考えることは妥当なことであり、自然の法則に則って人間の生理や身体の構造は説明可能だというのである。いや、そのようにすべきだというのである。彼は身体を、その上に精神面を積み上げるような存在ではなく、精神や道徳が知らしめる知とは別種の知をもつものと考えた。それは、次のような自然観と深くかかわっている。

4. 最も美しきもの——肉体における統一と調和

「自然 (*die Natur*) というものを深く見抜けば見抜くほど、次のことを強く確信する。個々の現象の限らない多様性にもかかわらず、自然はこの上もなく素晴らしい統一と調和を支配していることを。そして、自然のすべての部分が一緒になって大きなひとつの全体を構成しているということを。また、自然のすべての部分は、互いに手を差し伸べたり一緒になったり互いに依存しながら存在していることを、また、我々が住んでいるこの天体 (*der Weltkörper*) 即ち地球ですら、限らない広大な宇宙 (*das Weltall*) の一部分いやむしろ限りなく小さな部分を構成しているに過ぎないということを。…人間とその全存在について正しく理解したければ、自然の連鎖からそれだけを引きずり出したり個々をばらばらに見るのではなく、むしろ自然の連鎖の中で、その緊密な結びつきの中で観察すべきである。」²³⁾

彼がこの書において自然について論じ、そしてその自然の法則に応じた生活規則を習慣化することを主張するこの書の意図をくめば、また前述した彼の *Physis* と *Körper* の関係からすれば、この文中の「自然」という語を「肉体」と置き換えて読むことが許されるだろう。すなわち、

「肉体というものをよく観察してみれば次のことを確信するに至る。個々の現象は限りなく多様であるが、肉体はこの上なく最も素晴らしい統一と調和を支配している。肉体のそれぞれの部分は、結びついて大きなひとつの全体となる。肉体のそれぞれの部分はまた、互いに手を差し伸べ、結びつき、影響を及ぼしあいながら存在する…」と読みかえることができるだろう。そしてまたこれに続く文「我々が住んでいるこの天体 (Weltkörper)」, これを「我々が生きているこの肉体」と置き換えれば、彼の言う肉体というものがより明確に浮き彫りにされる。つまり、「我々が生きているこの肉体もまた、限らない広大な宇宙の一部分に過ぎないということを。…人間全存在について正しく理解したければ、肉体からその部分を引き出して個々をバラバラに見るのではなく、むしろ肉体というまとまりのなかで、その緊密な結びつきの中で観察すべきである」と。

シュレーバーは肉体を物質ととらえ、本来、自然そのものであると考える。そして肉体は自然の法則という知によって絶妙に調和と統一がなされているがゆえに、ひとつのまとまりのある最も美しいものであるという。

「地球上に存在するすべての創造物の中で最もまとまりのある美しきものは間違いなく人間の身体構造である。なるほど人間はその構成の変化に富んだ多様な特質のおかげで、各種の極端な外力に抗することができる。ほとんど他の動物では類を見ないことなのだが、たとえばまったく正反対の性質の異なる地域や気候風土においては、人間以外の動物はみな身体と外的世界との多様な関係ゆえに自然な生命状態の障害や病気にさらされる。したがって、自然の中の一切はある法則性に従属する。人間もまた先の障害から逃れるためには、従うべき法則に拘束される。生命が可能な限り侵害されず、規定どおりで、健康な状態を保持し得るような関係を知り、その法則を研究することは人間の義務である。動物は本能によって然るべき道を方向付け得る。しかしながら人間はこの点においての本能がないためにその大多数が差し迫った危険に曝されている。むしろ我々はこうした仕組みの中に創造主の無限の知恵が例外なくはっきりと言明されていることを理解するのである。人間には自己と自然を認識し理解する理性と能力、そしてこれにしたがって行為する自由がある。したがって人間はこの高い精神力を使用する術を学び、自発的に生活の規則を研究し、これにしたがって生活するよう努めるべきである。また、道徳面からと身体面からの無数の障害をさける努力をする中で、精神力を行使し、時にはそうした障害とやむを得ず接触する中で、ますます自己を高める術を学び、道徳的に自己を鍛え、豊かにし人間の真の使命即ち道徳的自立、道徳的高尚さに近づくことを目指すべきなのである。戦わずして勝利なし。」²⁴⁾

まとめにかえて

以上のように『健康の書』においてシュレーバーは、場の理論や動物磁気説といった当時の先端的科学に依拠しながら、生命体の本質とは何か、人間とは何か、人間の使命とは何かといった哲学的な思索を医学や医療のなかに展開した。それは後の『トゥルネンについて』に見られるような、国家復興のための具体的な軍隊力強化を直接的にめざすものではなく、人間存在の深奥への問いと自らの医学の道標を壮大に描いたものであった。新進気鋭の医師シュレーバーがそこにはいる。トゥルネンはこうした医師の自然観や身体観—

すなわち人間を生命体としてひとつのまとまりのあるものととらえ、人間本質にかかわるものとして肉体をとらえるといった一に牽引されて、その禁止令下においてもなお推奨されたのである。

注および引用文献

- 1) Schreber, D.G.M.: *Das Buch der Gesundheit. Eine Orthobiotik nach den Gesetzen der Natur und dem Baue des menschlichen Organismus*, Leipzig (Verlag von Fr.Volckmar.) 1839
- 2) 副題中にある Orthobiotik の語について、次のような理由から本稿では「整形生体学」とした。Ortho-は、Orthopaedia, Orthodox, Orthoduxus などの語にみられるように、「もとの」「本来の」を意味する。シュレーパーの100年前に N. アンドリーによってすでに Orthopaedia が著され、外科的手法ではない非観血的な身体矯正術が世に出されている。そこでは「子どもを (-paidion) まっすぐに (orthos-) する予防と矯正術」であった。(三井悦子, N. アンドリーの治療的運動論の検討『体育史研究』第10号1-12頁, 1993) シュレーパーはもちろんアンドリーに始まる「整形外科 (Orthopädie)」を踏襲する系譜にいるが、本書での Orthos-は、「矯正」というよりも、元々持っているものを変えずに成長させ、本来の能力を発揮させるという意味合いが強い。また、-biotik については本文全体を通じて広い意味での生物学・生命学をさしていることから、生体学という語を用い「整形生体学」とした。
- 3) 三井悦子, D. G. M. シュレーパーのトゥルネン推奨論について—国家復興期における国民の健康—『スポーツ史研究』第12号43-57頁, 1999
- 4) Schreber, D. G. M.: *a.a.O.*, S. 95f.
- 5) 体操場 (Turnanstalt) には、登攀・跳躍器具のほかに鉄棒と平行棒の設置を要求し、鉄棒と平行棒については高さや二本の棒の間隔を数値によって示している。また、彼が参照せよとしたヤーンとアイゼレンの書は次のとおりである。

Die deutsche Turnkunst zur Einrichtung der Turnplätze. (1816, 『ドイツ体操術, 体操場設置のために』)
- 6) Schreber, D. G. M.: *a.a.O.*, S. 95f.
- 7) *a.a.O.*, S. 96
- 8) *a.a.O.*, S. 97
- 9) *a.a.O.*, S. 93
- 10) Schreber, D.G.M.: *Das Turnen vom ärztlichen Standpunkte aus, zugleich als eine Staatsangelegenheit dargestellt*, Leipzig (Mayer u. Wigand) 1843 S.5
- 11) *a.a.O.*, S. 12
- 12) *a.a.O.*, S. 34
- 13) Schreber, D. G. M.: 1) Vorwort
- 14) *a.a.O.*, S. 91
- 15) *a.a.O.*, S. 3f.
- 16) *a.a.O.*, S. 66
- 17) *a.a.O.*, S. 92f.
- 18) Ritter Alfons, *Schreber das Bildungssystem eines Arztes*, Inaugural Dissertation zur Erlangung der philosophischen Doktorwürde der Friedrich-Alexander-Universität. 1935 S. 32f.
- 19) シャッツマン M. 『魂の殺害者, 教育における愛という名の迫害』岸田秀訳 草思社 1975, 少なくとも『健康の書』においては、シャッツマンの指摘するような「自然な身体の姿勢と動

き、自然な食習慣、自然な性行動などをきびしく抑えつけ」(p. 90) たり「自分の道徳的理想を自然法則と考えている」(p. 85) ような個所はない。

20) Schreber, D. G. M.: 1) S. 91f.

21) Schreber, D. G. M.: 10) S. 1

22) Schreber, D. G. M.: 1) S. 1

23) *a.a.O.*, S. 1f.

24) *a.a.O.*, S. 4f.